

ポートフォリオを用いた学習に関する一研究

—— 看護職の現任教育への活用に向けて ——

高 口 みさき

〔抄 録〕

ポートフォリオは、日本の看護界においても、2000（平成12）年ごろから注目され、徐々に導入されてきている。今回、ポートフォリオを用いた学習がどのような影響をもたらしたか、臨地実習指導者講習会受講生12名に対しインタビューを実施し、学習に影響を与えた体験から366のコードを抽出した。コードを意味内容の類似性でカテゴリー化して得られた、①ビジョン・ゴールを設定した体験、②面接を受けた体験、③元ポートフォリオを作成した体験、④凝縮ポートフォリオを作成した体験、⑤全体をとおした体験、の5つの体験から学習に影響を与えた要因を分析した結果、それまで培われた学習行動への自覚と、ポートフォリオ作成という新たな取り組みから得られた様々な影響を抽出することができた。看護職の現任教育においてポートフォリオを活用することは、成長の可視化に繋がるとともに、与えられる学習から、自分の意志で学ぶための大きなきっかけとなっていた。

キーワード：ポートフォリオ、臨地実習指導者講習会、看護職の現任教育

は じ め に

日本の学校教育はこれまで、教師主導で、知識や技術を教え込み、点数で子どもの学力を測定する教育が多くを占めていた。しかし、社会が大きく変動する現在では、変化に柔軟に対応し、自ら新しいやり方を想像したり、意欲的に取り組む力が重要となる。つまり、自ら課題を設定し、主体的に学び考えることを促すような教育のあり方への転換が求められているといえる。

近年、子どもを学習活動の中心において教育活動や評価を行う上で、ポートフォリオを活用した方法が注目されている。学校教育におけるポートフォリオは、学習者の学習の経過を示す成果物、提出物などを保管することで情報を一元化し、学習者と教師が共にそれを観察することによって、学習活動のプロセスを評価するために活用されている。ポートフォリオを活用することで、学習者が自分自身の学びを見つめ、進捗を確認しつつ学習を進めることができる。また、その振り返りをとおして自分自身の成長や課題を教師と共有することが可能となる。

日本の看護界においては、2000（平成12）年度ごろから注目され、徐々に導入されてきた。看護基礎教育の現場においても様々な活用報告がなされており、学内の教育のみならず、臨地実習でも活用されるようになってきた。しかしながら、看護学生の指導にあたる臨地実習指導者のポートフォリオの認知度は低いのが現状であり、効果的な活用がなされているとはいえない。

さらに、臨地実習指導者のような、学生の指導に当たる成人学習者においても、受講生の立場になったとたんに受け身的な学習者になってしまう姿が見られる。看護職は専門職であり、本来は常に自ら課題をもって主体的に学ぶ力を備えている必要があるが、与えられる教育に慣れており、指示された課題をこなすことが学習と捉えている現状が要因の一つと考えられる。そうしたことが、仕事上の問題に直面した時に乗り越える術を自ら考えることができず、早期離職やキャリア形成上の問題に繋がっているとも言える。

A県ではそうした現状を受け、2014（平成26）年度より、看護師等養成所の実習施設で実習指導の任にある者を対象とした「臨地実習指導者講習会」の受講生を対象にプロジェクト学習を導入しており、その中でポートフォリオを活用している。

今回、ポートフォリオを用いた学習がどのような影響をもたらしているのか調査をするため、臨地実習指導者12名にインタビューを実施し、学習に影響を与えた要因を分析した結果、今後の看護職の現任教育への効果的な活用方法について示唆を得ることができた。

I 看護教育におけるポートフォリオの導入状況

I-1 日本の教育におけるポートフォリオの導入状況

ポートフォリオは、もともと紙類や書類などを整理するために挟み込むファイルを意味しており、教育現場においては、英国の義務教育で使われ始めたもので、それまでの画一的・相対的な評価法に対し、一人ひとりの成長を重視しようと導入された評価方法である。

浅田豊は、「学校教育の中でいうところのポートフォリオとは、子どもの学習の経過を示すものや成果物、提出物などを補完し、教育的に活用することである。つまり具体的には、テストやレポート、作品などから宿題、グループ作業（制作物や絵）、学習記録、学習の反省日誌、自己評価、自由な写真、作業遂行に関するビデオに至るまですべてのものをファイルの中に長期間保管していくのである。そして子どもと教師が共に、適宜それを観察することによって、一人ひとりの子どもの学習活動のプロセスなどを長期計画的に評価していくという意味をもつ。」¹⁾と述べている。さらに、ジャニス・A・スミスによれば、「ポートフォリオの活用は、真正な学習を促進させる画期的な方法である。」とし、「ポートフォリオは、真正な学習のプロセスを通して学習を支援するための足場かけ（scaffolding）、ツール、共有等の手段を提供する。」²⁾と述べている。

日本におけるポートフォリオの導入については、西岡加名恵³⁾が、「総合的な学習の時間」が

施行された際、従来の筆記テストでは評価ができそうにない、それに代替する評価法はないか、という発想からポートフォリオ評価法が紹介されたことにより、大きく普及したと述べている。

ポートフォリオの具体的な活用方法として鈴木敏江⁴⁾は、プロジェクト学習と両輪で成り立ち、その成果をあげる、と提唱している。プロジェクト学習で「ビジョン(目的)」と「ゴール(目標)」を明確にし、ゴールに向かって自分がやったことや感じたこと、様々な経験・情報・気づき・感じたことをポートフォリオで一元化することの効果を述べている。

I-2 看護教育への導入状況と課題

日本の看護教育においては、2000年に大関信子⁵⁾、浅田豊らによって英国における卒後教育として紹介された。浅田豊は、「論理的に思考する力や情報を整理・統合・取捨選択する力、他者と協力して何らかの活動を推進する力、コミュニケーション能力などを総合的に養うことを目的としたポートフォリオ学習・評価が看護教育の中でもつ意義は大きい。」⁶⁾と述べている。

以降、様々なポートフォリオの活用について研究が報告されている。2012年に小島さやか⁷⁾によって文献からのポートフォリオ評価活用の現状が報告されているが、これによれば、2005年以降多くの研究がなされており、その対象は、基礎教育(学生)と卒後教育(看護職)がおおよそ半分以上で約9割を占め、学習者の主体的な取り組みを促す効果的な方法であると分析されている。

課題としては、金子八重子らの看護師への活用報告によれば「ポートフォリオは自己成長の記録であるがゆえに自己完結的な作業が多く、自分でモチベーションを維持することが困難になった場合に、つくる手が止まりそうになる。」⁸⁾との記述等から、効果的なポートフォリオ作成を支援できる環境づくりについてあげられている。2013年に看護基礎教育におけるポートフォリオの活用状況を調査した藤田千春ら⁹⁾による報告では、学生の自発的な学びにつながる一方で、一部の学生には負担感があることも述べられていた。

教員の評価・教育におけるポートフォリオの活用に関する研究は少ないが、安川仁子は、ポートフォリオ評価の特徴やメリットを教員が理解し活用する必要があるとして、看護教員養成課程修了者にポートフォリオ評価の認識を調査した。その結果、「ポートフォリオ評価に関心があり、意欲があっても、考え方や進め方がわからないために、一歩を踏み出せないでいる看護教員の姿」¹⁰⁾が示された。さらに、2013年に看護学校教員・臨地実習指導者・看護師のポートフォリオに対する認識の違いを研究¹¹⁾している。これによると、看護学校の教員は55.6%がポートフォリオの講義や研修会の受講経験があるが、臨地実習指導者では「ない」が94.4%、看護師は「ない」が全員であり、また臨地実習指導者はポートフォリオ評価を活用したいが難しそうと感じていることがわかった。

また、正木治恵¹²⁾は、看護領域での生涯教育をキャリアアップに確実に活かしていくための方策としてパーソナルポートフォリオの活用を紹介し、「パーソナルポートフォリオという手法は、専門職としての成長記録として、自分のそれまでの経験を再評価し、意味づけし、経験

から得たものを自分のなかで確固たるものにしていくうえで、役立つ。』¹³⁾と述べている。看護職は様々な研修や学習の機会に恵まれ、また仕事の中でも価値ある体験を多くしている。しかし、そうしたキャリアをファイル等に蓄積するという取り組みはこれまであまりなされておらず、経験してきたことが成長の実感につながっていない現状がある。看護職の卒後教育においてもポートフォリオの活用がすすめられているが、単なる研修や研究歴を記入するに留まっている場合もあり、正木治恵の言う、「経験を積み重ねると共に経験を糧にしていく力を培っていくことが、専門職たらしめていくことにつながる」¹⁴⁾ための、ポートフォリオの活用方法について検討する必要がある。

臨地実習指導者講習会は、看護職としてのキャリアを高めるため一つの節目となる研修であり、A県では、鈴木敏江の提唱するプロジェクト学習の手法を取り入れ、ポートフォリオ作成を試みている。これまで述べてきたように、ポートフォリオの活用は看護師としての成長に役立つ方法であると考えるが、その効果的な活用方法についての研究はまだ十分になされておらず、中でも臨地実習指導者講習会においてポートフォリオを活用した研究はみあたらない。

また、安川仁子の研究によれば、臨地実習指導者講習会受講生はポートフォリオについて未だ十分な知識をもっておらず、活用はしたいが難しそうと感じている。今後、多くの看護基礎教育機関でポートフォリオが導入されることが予測されるが、その指導に当たる臨地実習指導者がポートフォリオについて理解を深め、利点を活かして指導することで主体的に学ぶ力を備えた看護職の養成が可能になると思われる。そのためにも臨地実習指導者講習会においてポートフォリオを用いた学習を導入し、受講生自身が体験することは効果的と考えるが、そのことがどのような影響をもたらすかの知見はない。ポートフォリオを導入した学習がどのような影響をもたらしているか分析することで、より有効な活用の仕方や、評価の方法を知ることができると言える。

Ⅱ 臨地実習指導者講習会における受講生への調査

Ⅱ-1 A県の臨地実習指導者講習会の取り組み状況

看護教育における臨地実習とは、文部科学省『臨地実習指導体制と新卒者の支援』¹⁵⁾によれば、「看護の臨地実習は、看護職者が行う実践の中に学生が身を置き、看護職者の立場でケアを行うことである。この学習過程では、学内で学んだ知識・技術・態度の統合を図りつつ、看護方法を習得する。学生は、対象者に向けて看護行為を行い、その過程で、学内で学んだものを自ら実地に検証し、より一層理解を深める。」と述べられている。臨地実習を効果的に実施する為、都道府県が実施している実習指導者講習会は、看護師等養成所の実習施設で実習指導者の任にある者又は将来これらの施設の実習指導者となる予定の者を対象に『保健師助産師看護師養成所臨地実習指導者講習会実施要綱』に定められた8週間（240時間）の講習会である。

A 県では、自ら学ぶ姿勢をもって講習会に臨むため、鈴木敏江の提唱するプロジェクト学習の手法を用いて学習を進めている。鈴木敏江は、プロジェクト学習はポートフォリオと併用することで高い効果をもたらすとしている。具体的には、自ら設定したゴールへ向かう軌跡で手に入れた情報や考えたりしたこと等を1冊のファイルに時間経過の順にいていく「元ポートフォリオ」と、プロジェクトの最後にそれらを再構築し、学習の中で獲得した力を成果物としてまとめる「凝縮ポートフォリオ」の作成を提唱しており、当講習会においてもその作成に取り組んでいる。従って本研究において受講生が体験するポートフォリオは、この「元ポートフォリオ」及び「凝縮ポートフォリオ」を対象とする。講習会の具体的な進め方を表1に示す。また、ポートフォリオの作成にあたり、ほとんどの受講生が初めての体験ということから、1回以上の面接指導を実施し支援を行っている。

表1 臨地実習指導者講習会におけるプロジェクト学習の具体的な進め方

時 期	具体的進め方
講習会開始 (1～2日目)	プロジェクト学習及びポートフォリオ作成について、講習会担当者から説明を受け、講習会終了までのビジョン・ゴール、方略を記述する。
講習会中	ビジョン・ゴールを元に1週目から3週目ぐらいの間に3名の教員が分担して面接を行う。 講義・演習ごとに学んだこと、感じたことを俯瞰シートにまとめる。その他、講義・演習をとおして興味をもったこと、学習したこと等を『元ポートフォリオ』としてファイルにいていく。
講習会終了 2～3日前	A3のシート1枚に『凝縮ポートフォリオ』を作成する。
講習会終了日	『凝縮ポートフォリオ』発表会

Ⅱ-2 調査の目的及び方法

1. 研究の目的

臨地実習指導者講習会受講生のポートフォリオを用いた学習が、どのような影響をもたらしたか、質的帰納的に分析し、看護職の現任教育におけるより効果的な活用方法を検討する。

2. 研究方法：研究対象者、研究期間、データの収集方法・手順、データの分析方法

(1) 研究対象者

平成27年度臨地実習指導者講習会受講生64名の中から、今回初めてポートフォリオを作成した者で、同意が得られた受講生の中から、無作為に12名抽出した。

(2) 調査期間

平成27年7月～平成28年3月

(3) データの収集方法・手順

インタビューガイドに基づきポートフォリオを作成した体験、ポートフォリオ作成上の困難・課題等について、講習会終了後10日以内に、インタビューガイドを元に20～30分程

度の半構成的面接を行った。面接内容は了解を得てテープに録音し、コード番号で整理した。

(4) データの分析方法

データを逐語録に書き起こし、意味内容の類似性で分類、カテゴリーを抽出した。

(5) 倫理的配慮

あらかじめ研究目的、収集したデータは研究目的以外に使用しないこと及び本研究の終了時に録音データ・紙データを処分することを説明し、同意が得られた受講生を研究対象とした。また、参加をした場合でも、回答したくない質問に対しては回答しなくてもよいことを伝えた。収集したデータは厳密に管理し、個人が特定できないように配慮した。

Ⅲ 調査の結果

Ⅲ-1 調査対象者の属性

調査対象者の属性は表2のとおりである。

表2 調査対象者の属性

	年齢	性別	勤務先	臨床経験年数
A	41	女	厚生連	16年10ヶ月
B	38	女	医療法人	13年1ヶ月
C	34	女	独立行政法人	12年7ヶ月
D	35	女	医療法人	5年10ヶ月
E	41	女	市	19年1ヶ月
F	28	女	医療法人	7年1ヶ月
G	32	男	独立行政法人	11年1ヶ月
H	30	女	県	7年1ヶ月
I	40	女	医療法人	15年9ヶ月
J	27	女	医療法人	5年3ヶ月
K	35	男	独立行政法人	12年1ヶ月
L	27	女	医療法人	6年1ヶ月

性別は男性2名(16.7%)、女性10名(83.3%)であった。

平均年齢は34.3歳で、最高年齢41歳、最低年齢27歳、平均臨床経験は10年9ヶ月で、半数以上の7名が10年以上の臨床経験を有しており、十分な臨床経験を積んだ者が多かった。

Ⅲ-2 ポートフォリオを作成した体験が学習に影響を与えた要因

インタビューで得られたデータを逐語録に書き起こし、ポートフォリオを用いた学習の体験として、「作成した体験からの気づきや学び」について366のコードを抽出した。コードを意味内容の類似性でカテゴリー化した結果、学習に影響を与えた要因（カテゴリー）とその具体的体験（サブカテゴリー）からなる①ビジョン・ゴールを設定した体験、②面接を受けた体験、③元ポートフォリオを作成した体験、④凝縮ポートフォリオを作成した体験、⑤全体をととした体験、の5つの体験に分類できた。（表3）なお、コード化に当たっては、できるだけ対象の言葉そのものを活かすよう努め、サブカテゴリー、カテゴリーの抽出においてもその点に十分な配慮を行った。そして、ポートフォリオの効果的な活用方法について検討するため、

表3 ポートフォリオを作成した体験が学習に影響を与えた要因

体験	学習に影響を与えた要因 (カテゴリー)	具体的体験 (サブカテゴリー)
ビジョン・ゴールを設定した体験	自分のビジョン・ゴールを文章化することの困難さ	正直心構えができていないまま研修にきたから、文章化して見えるようにすることに苦しさを感じる
		先を見据えたゴール、って言われてもイメージがわからない
	漠然としていたものが書くことで実感に変わる	漠然としていたものが書くことで実感に変わった
	教員の後押しによる安心感	教員の後押しがあるとこれで進んで大丈夫と思える
面接を受けた体験	胸に落ちない感じをもつ	自分の道は自分で探せ、みたいな感じで求めていた面接とちょっと違った
		面接が終わっても胸に落ちない、それが自分を突き動かす助言だったのかな、そういう意図だったのかなと今にして思う
	学ぶものとしての自覚を高める	面接して自分の目標はすごい浅はかだったのかな、と思った
	面接の窓をいつでも開けておく	面接のタイミングもそれぞれ違うし、一回の面接では正直足りない ビジョン・ゴールが初めてやる人にはわかりづらいので指導がもらえるとうい すごい悩んでいる子もいたから、面接の窓はいつでも開けてほしい
元ポートフォリオを作成した体験	無意識が意識になって関心があることを勝手に集めていたことへの驚き	無意識が意識になってた。その時は何も思わずに普通に書いてただけなんだけど 無意識が意識になって勝手に集めてて、自分の中で自分の言葉にできた
	自分の言葉で書くことで、自分を客観的にみられることへの気付き	文章化するの苦手だし、書くのは苦手だけど、自分が感じてたことがわかるから文章にするとやっぱり違うのかな
		授業を聞いた後に思ったことを自分の言葉で書いていたのが今までにない
		興味がでた部分は自分の言葉にすごいまとまっていた
		一番残った言葉を書いたりとか、先生の資料にはない言葉を書きとめた
	自分の言葉で書くことで、自分を客観的にみられることへの気付き	自分の本当の心のうちは自分しか見ないものにしか書かないので、自分を客観的に見れた
		毎日意識して書くことが大事で、たまっているのを見ると、自分が何に関心があるのかわかる
		いっぱい資料もらっても覚えてないけど、自分で俯瞰シートに気に留めて書いたから振り返りができた
		これまでの研修では、資料はもらった瞬間から紙になっていく状況の中、意識してファイルをつくれたことがすごい
	ポートフォリオが、自分の成長の軌跡となることへの気付き	自分の成長の軌跡として溜めていくことができた
		引がかかった時に書き留められるようになったから、後から見た時にぱっとわかる
		気になったことを積み重ねれば自分が戻ってくる
		漠然とした重要が、私がこれがやりたいから、に変わった
	ポートフォリオを自分の意志で学ばさっけにする	ポートフォリオがなかったら、だらだらしていたと思うから学習のきっかけにはなった
		方略で振り返ることをあげていたからちゃんとやろうと思った
		本当に自分でやらないといけないし、最後に凝縮ポートフォリオをやらなといけないからやり続けられた
		自分が気になったところを調べようとする、自分で調べないといけない 書き残して、前の先生も言ってたなってなると、それってそんな大事か、調べようかってなる
	ポートフォリオを活用することで学びがぶれないことへの気付き	元ポートフォリオがなかったら膨大な資料からキーを探す気がなくなるし、伝えたい部分がものすごくぶれたと思う
		元ポートフォリオを見たら、自分が学んできたことはこれだなんて何年たっても思えるから、あるのとないのとは全然違う
		人の話を聴くことを目標に入れていて、聴いていたら今後どういうふうに働いていこうか、という目標が見えてきた
		いつもだったら結構あっさりさよならしちゃうところをファイルのポケットに入れたりして
	他の受講生からももらったものや声をいつもより大切に感じる	他の受講生から、書いているとすごい役立つし、自分のしたいことが見えてくるって言われて、自分も頑張らないといけないと思えた
	ポートフォリオを上手に活用することで、クラスの雰囲気よくなる	真面目にやっているとか茶化されることがあるけど、今回は結構周りの子も真面目にやっけて、クラスの雰囲気も助かった
		皆、ポートフォリオを上手に活用して、何か持って帰ろうとしていると思った
	興味があるところをピックアップしていることへの気付き	興味が無いことはやらないから、ポートフォリオがなかったらあんなに勉強しない 自分に興味があって実際に使えそうなところをピックアップしてしまう

ポートフォリオを用いた学習に関する一研究（高口みさき）

表3 ポートフォリオを作成した体験が学習に影響を与えた要因（続き）

体験	学習に影響を与えた要因 (カテゴリー)	具体的体験 (サブカテゴリー)
凝縮 ポ ー ト フ ォ リ オ を 作 成 し た 体 験	凝縮ポートフォリオを作る過程で、元ポ ー ト フ ォ リ オ から 振 り 返 る 意 味 を 実 感 す る	振り返りの中のまとめが凝縮ポートフォリオにでたから、振り返り大事だな、 と思ったし、やってよかった
		やっている最中は後回しになってたけど、最終的には俯瞰シートを書いてたこ とが学習の捕捉になってた
		俯瞰シートを振り返った時に意味あることをしてきたんだな、と思った
		最初は面倒だと思ったけど、書き留めるってことがいままでなくて新鮮だった 気づきや驚き、自分の感情を交えて書き留めたことがなかったので振り返ると 面白い
		今までの研修はその時だけっていう感じ。終わったらあんまりちゃんと考え てなかったけど、振り返ることがすごい大事なんだと思った
	元ポートフォリオを見た時に、自分の学び はこれしかない、と自分の中で落ちる	自分の中で落ちた。これしか浮かばない
		私の中で印象に残った言葉を集めてたので、それを載つけた
		元ポートフォリオを見た時に自分の学びはこれしかでてこなかったからすぐ に書けた
	凝縮ポートフォリオを作りながら、心に残っ たことや学べたなと思ったことに気付く	自分が大事だなんて思うところはどの授業でも同じだった
		とりあえず気になるものを読んだりしてたら、最終的になんだかんだ繋がった
		凝縮ポートフォリオで、自分が一番残った、ひっかかったことができた
	発表をとおして客観的に見てもらうことの 重要性に気付く	改めて作っているうちに心に残ったことや学べたなって思ったことに気付けた
		発表するのは辛いけど自分の中だけじゃなくて、客観的に見てもらうのは大事 だと思った
		迷いがある人はそれが凝縮ポートフォリオにでてしまうから、その段階で作る のは難しい
		凝縮ポートフォリオは内容の一部だから、何でそういう考えになったの、って 聞きたくなる人がある
	同じ研修を受講していても、それぞれ目指 していたものや表現方法が違うことを実感 する	発表することで自分の思い、人に言うことで学んだことが学べた
		凝縮ポートフォリオになると何となくその人の色がでてる
		他の人を見て、あーなんかこれでいいんだなって思ったから、作り始めてか らは不安はなかった
		確かに自由にしてもらった方が、その人の学んだこととか性格も踏まえてわかる
全 体 を と お し た 体 験	ビジョン・ゴールを意識することで、学ん だことが全部繋がっていくことを実感	発表を聞いたら、個性がすごいあるし、皆の目指していたものが本当に違う、 表現方法も違うと思った
		凝縮ポートフォリオを見ると、こういう風に考えて授業受けてたんだな、とか 自分と違う考えをもっていてすごいと思う
		凝縮ポートフォリオを見て、その人が一番 伝えたい事がわかる
		凝縮ポートフォリオはパッと見て学んだことを人に伝えやすい
		ああ、一番伝えたいことはここなんだな、っていうことがわかる
	自分がこの研修で何をしたいかを中心に学 ぶと、やる気が全然違うことを実感	意識してなかったら課題すら見つかってなかったけど、新たな課題を見つけられた
		単独的な学びではなくて、全部繋がっていく。それに近いようなことを勝手に 周りからも吸収しようとしていた
		使えそうな内容を自然に開いてたし、意識づけができてた
		よくわかってないことに書きながら気づいて調べたところがこれまでにない。 これがなかったらやらなかった
		ビジョン・ゴールがあることで自分の気持ちを時々振り返りながらやっていけた
		ビジョン・ゴールを意識すると、何をやっていても目指していることが思い出せる
	自分がこの研修で何をしたいかを中心に学 ぶと、やる気が全然違うことを実感	ビジョン・ゴールを意識することで普段だったらすり抜けていたところが心に 入ってくる
		自分で課題を作って、それに向かって、だから、やらされてる感がなかった
		ゴールがなかった分、自分がやりたい方向に進めた
		先生が大事っていうことを書きとめているのと、自分がこの研修で何をしたい のかっていうことを中心に書き出すのでは、やる気が全然違う
		やって楽しかった。自分発信でやりたいことに取り組めるっていうことがな かなかない
		これ絶対研修終わってからみんなに話したい、ってことを拾っていくのは楽しい 勉強しないといけない、楽しいという感覚はできたから、意味があったと思う

表3 ポートフォリオを作成した体験が学習に影響を与えた要因(続き)

体験	学習に影響を与えた要因 (カテゴリー)	具体的体験 (サブカテゴリー)
全体をと おし た 体 験	正解はなくて、自分がやったことがその結果だという気付き	自由ってことが本当の意味でわかったらちょっと楽になった
		やったものがその結果だから、もうゴールにはこだわっていない
		ゴールがないってわかって、いいも悪いも自分の行動が成果になるっていう感じ
		自由に目標を設定する学習が新しい体験と発見
		研修が全部終わってみて、感じたことや学びをどういかしていくかは人によって全く違って思った
	この学び方は自分が気持ちをちゃんともっていないとやれないことに気付く	正解がないっていう、結果として自分が得られたりすればいいのかな、っていう感じでとりくんだ
		自分が気持ちをちゃんと持っていないときはやれなかった
		ゴールがないからボリューム感がちょっと慣れない
	型にはめるのを途中でやめて、自分のやり方に変えたら楽しくなる	経験を重ねてからだこそ、自分に必要なものを選びながら書けた
		正直めんどくさいな、毎日書かないかんのか、と思っていた
		最終的には自分のためのものだから自分なりでいいんじゃないかな、って思った
		自分のものだったら自分ことで書いてもいいのかな
	ファイルが増えていく事で、自分の学んだことが肉になっていくことがわかる	型にはめるのを途中でやめて、自分のやり方に変えたら楽しくなった
		正解がないってわかったんで、出たものが正解なんだろうな、と納得してつくった
		目に見えて自分の学んだことが肉になっていくことがファイルが増えていく事でわかった
	実際に自分でやってみて、ポートフォリオの良さに気付く	残そうっていう意識が芽生えたから、学習に対する見方が変わった感じ
		最初は目標を決めたからだけど、ポートフォリオが増えていくのがだんだん楽しみのになった
		ポートフォリオの研修を受けてもわからなかったけど、実際自分でやってみるとよくわかった
	解決するすべを自分たちで探した	ポートフォリオは成果がわかるから自分の実習指導とかにやるのはいいかも
		自分が学んでみて学生のポートフォリオを見るのが楽しみ
	アドバイスをし合うことでお互いに成長できることを実感	皆ネットとかで調べていて、結局正解がないってことに落ち着いた
		手探りだったから、いろんな人に相談して主体的に解決するすべを探した
	枠のない自由を与えられることへの不安を感じる	グループの皆にビジョン・ゴールを発表し合ってコメントもらったやつの方が腑に落ちた
		今までの学習では教科書見れば見本があったけど、枠のない自由を与えられるといざどうしていいかわからなくて困った
		自由って言われることがすごい不安で、自由っていう言葉におびえた
	自由に慣れていないから、教員が求めていることを気にして疑心暗鬼になる	なんでも自分で考えなきゃいけないっていうのはあんまりやったことなかった
		はじめは手探りで常に不安が付きまっていた
		どこまで先生が求めているのかな、成果物として一定のラインがあったのかな、と気にした
		自由に慣れていない。疑心暗鬼で先生の評価、求めることを気にしてる
	これまでの研修はやらされてる感に囚われていたと気付く	正しいもの、求められているものが作れるのかなという感じで不安だった
		最初のうちは正解ってなんだろうと思いつながら作ってた
		これまでの研修はやらされてる感がすごいあって、課題を出すために必死に聞く、やらされてる感に囚われていたと気付いた
		皆の発表を聞いて本当に自由だし、自由っていう意味がそこでわかった
	自分なりのやり方をしたから、これがポートフォリオに即しているのか今でもわからない	先生の求めるところをやらずにちゃいけない、っていうのが今まではあったけど、こういう学び方もあるんだっていうのを知った
		これが果たしてポートフォリオというものに即しているのか、っていうのはわからない
		過去の人が作ったものの提示があるとわかりやすい
		自分なりの使い方をしたから、それがあってたのか今でもわからない
		看護師は真面目だから自由だと迷う。こうやってくださって言われた方が、あ、そうだってなる

それぞれの体験ごとに学習に影響を与えた要因について分析をした。分析にあたっては、講習会担当者及び学識経験者のスーパーバイズを受けた。

なお、以下の考察では、学習に影響を与えた要因（カテゴリー）を【 】で、具体的体験（サブカテゴリー）からの記述を〈 〉で表す。

Ⅳ ポートフォリオを作成した体験が学習に影響を与えた要因についての考察

Ⅳ-1 ビジョン・ゴールの設定と面接を受けた体験が学習に影響を与えた要因

ビジョン・ゴールを設定した体験が学習に影響を与えた要因として、【自分のビジョン・ゴールを文章化することの困難さ】が抽出されており、自分から目的をもって研修を受講に来たわけではなく、受け身的な姿勢で臨んでいる受講生の姿が窺われる。しかし、苦しみながらも文章化してみることで、【漠然としていたものが書くことで実感に変わる】体験をし、表現することの重要性も感じる事ができている。この要因は、教える側から提示した目的・目標をとおしてでは得られない、学ぶものとしての自覚に繋がるものと考ええる。

一方で、先を見据えたゴールはなかなかイメージがつきにくく、【教員の後押しによる安心感】が得られることも抽出されている。ほとんどの受講生はこれまでの学習において、目的・目標は提示されるものであり、自分自身でゴールを考えるという経験がないため、この時点で先に進めずその後の学習に影響を与えてしまう可能性もある。本来は自分自身で設定するビジョン・ゴールであるが、不安を感じている受講生には大丈夫だ、という後押しをすることも重要と考える。

次に、面接を受けた体験が学習に影響を与えた要因として、【腑に落ちない感じをもつ】ことが抽出された。ビジョン・ゴールを元に面接は実施しているが、あくまでもそれを設定するのは自分自身であり、〈面接が終わっても腑に落ちない〉と感じるのは、その時点での答えをもらえると期待している姿が窺われる。しかし、〈それが自分を突き動かす助言だったのかな〉、と感じているように、そこから自分自身で答えを考えてみる、ということのスタートになっていたと後になって気付いた受講生もいた。その意味で〈腑に落ちない〉ということが、実は重要な学習の動機づけになっていると言える。

Ⅳ-2 元ポートフォリオ・凝縮ポートフォリオを作成した体験が学習に影響を与えた要因

元ポートフォリオを作成した体験では、日々膨大な学習内容が流れていくなかで、自分でも気付かないうちに、必要な学びを蓄積していた、という【無意識が意識になって関心があることを勝手に集めていたことへの驚き】が要因として抽出された。ポートフォリオを始めた当初は何も思わずにただ、感じたことを書きとめていたが、ある時振り返ってみると関心があることを勝手に集めていた、ということが、純粋に驚きとして表現されている。

また、上記の驚きをもたらすためには、【自分の言葉で書くことで、自分を客観的にみられることへの気付き】も重要な要因と考える。受講生は教員が教えたことを書きとめるだけではなく、自分がその授業を受けてどのようなことを思ったか、を正直に書いていく事が学びをよりリアルにし、自分のものとすることに役立つ、と感じている。非常に単純なことではあるが、実はこれまでの教育であまりなされていなかったことではないか。佐伯¹⁶⁾は、「わかる」ということを長期記憶である意味論的記憶とエピソード的記憶が関与しているとし、蓄積してきた知識である意味との結びつきと、エピソードである経験との結びつきをとおして「わかる」ことと、「わからないことがわかる」こと、と述べている。つまり、記憶はその場の空気や匂い、自分の感情等とともに蓄積され、学んだ知識と結びついた時に「わかる」となる。その意味で、どんな小さなことでも自分の言葉を書きとめていくことが重要であり、ポートフォリオを実施する上で欠かせない内容となると考える。

さらに、ポートフォリオを蓄積していく事で、【ポートフォリオが、自分の成長の軌跡となることへの気付き】をしており、これまでの研修ではもらった瞬間からただの紙になっていた資料が、意識してファイルを作れた、と感じている。これまで経験してきた学習でも講義等でももらった資料を整理する、という行為は行ってきたと思われる。しかし、今回はただの紙ではない、と感じていることから、ポートフォリオを作っていく、という意識がその資料に意味を見いだしていることが窺える。そしてこのことは、苦勞して設定したビジョン・ゴールや、無意識のうちに発見した自分の関心が、学びに意味をもたらし、【ポートフォリオを自分の意志で学ぶきっかけとする】要因に繋がっていると考える。漠然としていた重要が、〈私がこれがやりたいから〉に変わる瞬間、自ら学ぶものへと大きく成長を果たしている。

さらに、【他の受講生からもらったものや声をいつもより大切に感じる】や、【ポートフォリオを上手に活用することで、クラスの雰囲気よくなる】という要因から、ポートフォリオが受講生同士の学びの可視化に役立ち、関係する仲間との関係性の深さやクラス全体の学ぶ雰囲気に影響を与えていることが窺われる。

一方で、元ポートフォリオが意識していなくてもビジョン・ゴールに影響を受けるということから、【興味があるところをピックアップしていることへの気付き】という要因も抽出され、ともすると学びが興味関心に偏ることがあるという示唆が得られた。金子八重子らがポートフォリオは自己完結的な作業が多く、モチベーションを維持することが困難になった場合に、他者からのフィードバックを得たり、他者のポートフォリオを見る機会があるとよいと述べている。自己完結的な面は「学びが偏る」ということにもつながるため、同様な機会が必要と考える。

次に凝縮ポートフォリオを作成した体験が学習に影響を与えた要因として、【凝縮ポートフォリオを作る過程で、元ポートフォリオから振り返る意味を実感する】ことが抽出された。ポートフォリオを作っている最中は面倒に思ったり、他の演習等での課題に追われ後回しになったりしながらも、最終的に凝縮ポートフォリオで振り返ると、意味あることをしてきた、

と実感できている。また、凝縮ポートフォリオを作成する際に【元ポートフォリオを見た時に、自分の学びはこれしかない、と自分の中で落ちる】ことや【凝縮ポートフォリオを作りながら、心に残ったことや学べたなと思ったことに気付く】という要因が抽出された。受講生は〈自分の中で落ちた〉とか〈大事だと思うことはどの授業でも一緒だった〉、と自分の凝縮された学びが浮き出てくるような感じを体験している。こうした体験は自分が成長したことへの肯定と、振り返りの重要性を学ぶ機会になっている。

凝縮ポートフォリオは発表の機会を設けているが、この体験から、【発表をとおして客観的に見てもらうことの重要性に気付く】や、【同じ研修を受講していても、それぞれ目指していたものや表現方法が違うことを実感する】、【凝縮ポートフォリオを見て、その人が一番伝えたいことがわかる】という要因が抽出されている。元ポートフォリオで得られた学びを凝縮しそれを発表する、ということをとおして、先に述べたような学びの可視化がさらに深まり、自分の学んだことに気付いたり、他の受講生の学びの状況にも興味を抱いたりしている。また、同じ講義を聞いていてもその学びが一人ひとり違ったものになることは当然のことであるが、個性豊かな発表を聞くことで、本当の意味で得たものの違いを実感することができている。こうした体験は、凝縮ポートフォリオを自由に作成させたことが影響していると思われる。教師は所定の様式や目的にあった内容、というような枠にこだわりがちだが、学ぶものを信頼し、個性の発現を支援することが重要と考える。

IV-3 全体をとおした体験が学習に影響を与えた要因

全体をとおした体験が学習に影響を与えた要因として、【ビジョン・ゴールを意識することで、学んだことが全部繋がっていくことを実感】することが要因として抽出された。元ポートフォリオを作成している時は無意識が意識になって関心があることを勝手に集めていたことに驚いていたが、全体をとおして振り返ってみると、ビジョン・ゴールを意識することで、これまでの学習ではあまり意識していなかった学びの繋がりに気付いていることがわかる。〈何をやっていても、目指していることが思い出せる〉という体験にあるように、ビジョン・ゴールが学びの方向性に大きな影響を及ぼすため、講習会当初の方向付けの重要性を再確認するとともに、ビジョン・ゴールの意識づけを継続的に行う必要がある。

また、【自分がこの研修で何を得たいかを中心に学ぶと、やる気が全然違うことを実感】するという要因も抽出された。与えられた目標でなく自分が何を得たいか、ということを中心に学ぶという体験が、〈やらされてる感がなかった〉、〈やる気が全然違う〉、〈やって楽しかった〉等の実感を生んでいた。元ポートフォリオを作成した体験では、自分の意志で学ぶきっかけになってはいたが、〈ポートフォリオがなかったら、だらだらしていたと思う〉と言う言葉にあるように、ポートフォリオをやらされている感はあったかもしれない。しかし、自分自身の内から出る課題が見えた時、やる気が違ってきたことがわかる。ビジョン・ゴールの設定で終わ

るのでなく、そこから課題発見に繋がるような支援も必要と考える。

さらに、【正解はなくて、自分がやったことがその結果だという気付き】が講習会での学びは他の誰のもでもなく自分のものである、と実感する重要な要因として抽出されている。〈自由ってことが本当の意味でわかった〉、〈もうゴールにはこだわっていない〉という体験は、教員が求める正解を探しても意味はなく、自分が何を学んだのか、が重要であることへの気付きと、それをとおして学ぶものとしての責任と自覚が生まれていることがわかる。それと同時に、【この学び方は自分が気持ちをちゃんともっていないとやれないことに気付く】という要因も抽出されており、〈正直、めんどくさいな〉と思ったり、決められたゴールがないので、どこまでやればいいのかも自分次第という、揺れ動く気持ちの中で学び続けることの大変さも感じとっている。

ポートフォリオの作成については、【型にはめるのを途中でやめて、自分のやり方に変えたら楽しくなる】、【ファイルが増えていく事で、自分の学んだことが肉になっていくことがわかる】という要因が抽出された。最初は正解を探してみたり、教員が求めるポートフォリオを作成しようとしていたが、〈自分のためのものだから自分なりでいいんじゃないか〉と思えた時、枠を探す学習から、自分のための学習へと変化が起こっている。そうして自分なりのポートフォリオとしてファイルが増えていくことで〈自分の学んだことが肉になっていく〉と言う言葉にあるように、学びが自分自身の中にしっかりと定着していることを実感できるようになったのではないかと。こうした実感が【実際に自分でやってみて、ポートフォリオの良さに気付く】という要因に繋がっていると考える。

教師はともすると安易に学習の枠組みを提示しがちだが、与えてしまえば学習者はそれに囚われ、自分自身で考えるという思考を停止させてしまう。【解決するすべを自分たちで探した】、【アドバイスをし合うことでお互いに成長できることを実感】という要因にあるように、ポートフォリオを用いた初めての学習に戸惑い、インターネットで調べたり、本を読んだりし、わかったことを仲間同士で情報交換して正解を必死に探していた。しかし、それ自体がまさに〈主体的に解決するすべを探した〉ということであり、調べたことで「正解はなくていいんだ」と納得し、自分なりでよい、という結論に辿り着いている。

一方で、【枠のない自由を与えられることへの不安を感じる】、【自由に慣れていないから、教員が求めていることを気にして疑心暗鬼になる】という要因も抽出された。〈枠のない自由を与えられるとどうしていいのかわからなくなる〉、〈自由という言葉におびえた〉という言葉にあるように、枠がないことへの不安を強く感じ、教員が求める一定のラインがあるのではないかと、それを探し出そうとしている姿が窺われた。こうした受講生が思い描いている教員像は、「必ず正解をもっていて、そこに合致する学びができたかを常に評価してくれるもの」としてとらえており、「正解はない、自分自身でゴールを決めろ」と言われたことが、自分自身のそうした固定観念に対峙する一つのきっかけになっていると考える。

こうした体験をとおして、【これまでの研修はやらされてる感に囚われていたと気付く】ようになっている。こうした気づきは、通常の学習体験を繰り返していてもほとんど意識することなく過ぎていくと思われる。今回のように、枠を与えられず、自分自身でゴールを決め、成果をまとめていくという学習体験が受講生の意識を変える大きな刺激になったと考える。

また、【自分なりのやり方をしたから、これがポートフォリオに即しているのか今でもわからない】という要因も抽出された。ポートフォリオを用いた学習は実施したが、〈それがあつたのかわからない〉という言葉にもあるように、やってきたことに自信がもてなかったり、〈過去の人が作ったものの提示があるとわかりやすい〉、と、枠組みを求めている受講生も少なからずいることがわかる。始めてポートフォリオの作成を体験した受講生は当然、こうした思いを抱いていると思われるが、この要因が影響して学びが肯定的に捉えられない場合も考えられるため、凝縮ポートフォリオ発表後にもフォローアップを行う等、対応を検討する必要があると考える。

V 効果的なポートフォリオの活用方法について

ポートフォリオを用いた学習が影響を与えた要因について考察し、看護職の現任教育における効果的な活用方法について考究する。

1. 受け身的な学習姿勢に気付かせる

教師主導の与えられる教育に慣れていると、それで学習したと思い込み、なんら疑問をもたないまま研修期間が過ぎ去ってしまう。今回、自分のビジョン・ゴールを考えるように言われ、文章化する苦しさを体験したことが、これまで自分が学習してきたと思ってきたことが実は受け身的だった、と気づかされる契機となっている。ここを起点として、学ぶものとしての自覚が生まれており、その効果を考えながら意図的に学習を導入することが必要と考える。

受講生は成人学習者であるが、自ら目標を設定するという学び方に慣れておらず、戸惑い、面接等をとおして教員に助言を受けたいと考えている。しかし、個別の目標であるが故、「面接を受けても腑に落ちない」、という感想をもっている。後になってみるとそれも教員の意図だったのかな、と振り返っているが、学び方に不安を感じている当初は、いつでも支援が受けられる体制を整えておく必要がある。

2. 自分の意志で学ぶきっかけとする

ほとんどの受講生が、初めはなんとなく集めていた元ポートフォリオが、だんだん蓄積されていくうち、苦しみの中で文章化したビジョン・ゴールに無意識のうちに引き寄せられていたり、同じようなことがいつも気になっているということに気付いている。そして、その発見に

驚き、今度は意図的に集めるようになり、楽しい、と表現するように変化する。そうして作成されたポートフォリオは自分の成長の軌跡となり、これまでの研修ではもらった瞬間からただの紙になっていた資料が、自分にとって意味あるものと感じられるようになる。ここで重要なのは、教員が言ったことや黒板に書いたことをまとめるのではなく、自分の言葉で表現することだと考える。自分の言葉でポートフォリオを綴っていくことで、その授業を受けた時の自分が戻ってき、リアルに学びが再現されていくと考える。

以上のことから、受講生はポートフォリオに綴っていく意味を見いだすまでにある程度の時間を要することがわかる。しかし、その意味に気付いたとき飛躍的に学び方が変化しており、それまで信頼して辛抱強く見守る姿勢が重要と考える。ポートフォリオに挟む内容は何でもよいが、できるだけ自分の言葉で残していくよう、アドバイスを与えるのもよいと思われる。

3. 学びの可視化を活用する

手探りで進める学びであるからこそ、同じ悩みをもつ受講生同志の情報交換や支援はかなり綿密に図られていた。A県では、ビジョン・ゴールの発表を早期に行い、講習会最終日の凝縮ポートフォリオの発表を実施している。仲間からのアドバイスは「腑に落ちた」、と述べており、同じ学友仲間として協力し合う姿勢が自然にできていることは貴重な経験と言える。

また、発表をとおして同じ講習会を受講していても学びやその表現方法は違う、ということを実感している。看護実践では、対象者の個別性を重視することが求められる。凝縮ポートフォリオを作ることや、発表の機会をもつことは、看護をするために重要な想像力を養うことにも役立つ、と感じている。

以上のことから、こうした受講生同士でのアドバイスや発表の機会をもつことは、自分自身及び他者の学びの可視化になり、ポートフォリオを自己完結で終わらせず、個々の違いを確認し自分を際立たせる効果を生む。さらに、自己学習能力に繋げる自己評価能力を高めるためにも非常に重要となるため、ポートフォリオを作成していく中で大いに活用していく必要がある。

4. 正解に囚われていたことに気付かせる

ポートフォリオの作成には特に決められた枠はなく、自分のビジョン・ゴールを目指して学んだことを自由にファイルし、その成果を発表するよう説明している。しかし、枠のない自由に不安を感じ、教員が求めている正解を探して疑心暗鬼になる受講生の姿があった。この不安な気持ちを体験することこそが、これまでの学びが実は自分の意志で学んでいるのではなく、与えられた課題をすることで満足していたり、常に誰かの評価を気にしながら学習をしていたことに気付くきっかけとなっている。

多くの受講生は、初等中等教育から、看護基礎教育、看護の現任教育とこれまで何年にも亘り学習体験を積んできているが、そのほとんどが教師主導で、与えられた枠の中で教師が求め

る正解を探す，ということを疑問に感じることもなく過ぎてきている。そのため，きっとどこかに正解があるはずだと思い，インターネットで調べたり，受講生同士で情報交換したりしている。そうした体験を経て，本当に正解はなくていいんだと納得し，自分が学習したことがその結果だ，と思うことができていた。

成人学習者においては，一人ひとりの課題が違っており，教師の求める正解を探しても意味はない。西岡正子¹⁷⁾は，「アンドラゴジーにおいて教師は自分の知識を学習者に押し付けるのではなく，学習者が自分で学びたいことを学ぶのを助けるということをしなければならない。自己主導型の探索を主とするアンドラゴジーにおいては，教師は学習者に対して答えがすでに決まっている質問に応答する能力を育成するのではなく，学習者が自分自身で問題を発見し，その答えを見つけ出すのを助けるということに大きな責任をもつのである。」と述べている。受講生は成人学習者ではあるが，ペタゴジー的な学習から脱却できていない者も多いことが本研究で明らかとなった。ポートフォリオを用いた学習により，これまでの自分が決められた枠組みや教師の求める正解に囚われていた，と気付けたことが，アンドラゴジーによる学習に導くよい契機になる。従って教師は，学習者が出してきた学びを安易に評価してしまわず，あくまでも学習者が自分で考えたこと自体を評価することが必要である。その姿勢を貫きとおすことで学習者は「これでいいんだ」，と安心し，真の自分の学びに向かうことができるようになると思う。

5. 看護職の現任教育への導入の意義

看護基礎教育の現場においてもポートフォリオを用いた学習は徐々に導入されつつある。しかしながら，その指導にあたる教師や臨地実習指導者自身が体験しておらず，研修等で説明を受けても難しそう，と感じている現状があった。

今回の調査で，「実際にやってみてよくわかった」，「学生のポートフォリオを見るのが楽しみのになった」，という声が聞かれたように，その良さを実感し，実習指導の際にも捉え方が変化していることがわかった。臨地実習指導者を養成する講習会において，受講生が実際に体験することで，ポートフォリオを用いた学習への理解が深まり，より効果的な看護教育への導入が図れるものと考ええる。そうした姿勢は学習者への指導の自信にも繋がり，過密で主体性が育ちにくいと言われる看護教育において，今後大きな変化をもたらす可能性があると考ええる。いくら講義や演習で主体性を育てる教育を説いても，体験していないことには実感が伴わず，結局は講習会を終えて実際に学生指導にあたるときに，自分が教えられたように教えてしまう。一度の体験が与える影響には限界があるが，少なくともある程度の見通しがもてるはずである。学生が課題を見つけられず，どのように解決策を見いだせばよいか悩み，不安を訴えたとしても安易に答えを与えず，その不安も大事な学習であることを理解し，自分で学ぶことを支援できるようにすると言える。その意味で，指導者を養成する講習会で自ら体験する機会を設ける

ことは大きな意義があり、今後も継続していく必要がある。

また、臨地実習指導者講習会の受講生は看護職としては中堅で、仕事に対する意欲が停滞しやすい時期でもある。受講生は、ポートフォリオを作成する体験をとおり、この学び方は看護実践にも活かせることを感じ、自分の意志で学ぶことの楽しさや成長の実感をもつことができていた。このことは受講後もパーソナルポートフォリオとして継続することで、自分自身のキャリアを大切にす気持ちや、さらにはよりよい看護を目指す専門職業人としての意識を高めることが可能になることを示唆している。

お わ り に

今回、臨地実習指導者講習会受講生のポートフォリオ作成体験が学習行動に与えた影響についてまとめ、それまで培われた自分自身の学習行動への自覚と、ポートフォリオ作成という新たな取り組みから得られた様々な影響を抽出することができた。

研究の限界としては、A県で実施している臨地実習指導者講習会は鈴木敏江の提唱するプロジェクト学習とともにポートフォリオを作成しており、プロジェクト学習からの影響も受けていることが考えられる。

今回の研修は2ヵ月間の臨地実習指導者講習会の期間について調査を行ったが、本来ポートフォリオはパーソナルポートフォリオとして、生涯学びを蓄積していくことで、自分のキャリアを客観的に見つめ、よりよい生き方を歩んでいくために意味をなすと考ええる。講習会終了後すぐに面接を実施しているが、ポートフォリオを継続していくことの良さを実感しながら、今は仕事でぐったりで継続できない、という受講生の声もあった。どのようにモチベーションを維持していくかが、今後の研究課題と考える。

〔注〕

- 1) 浅田豊「新しい学力観に立つ日本の学校教育におけるポートフォリオ学習の可能性と意義」『Quality Nursing』, 6(3), p. 54, 2000年
- 2) ジャニス・A・スミス/翻訳: 森本康彦「ポートフォリオ総論——海外の活用から」『大学力を高めるeポートフォリオ エビデンスに基づく教育の質保証をめざして』東京電機大学出版局, 2012年, pp. 4~5
- 3) 西岡加名恵『教科と総合に活かすポートフォリオ評価法』図書文化, p. 4, 2003年
- 4) 鈴木敏江『ポートフォリオとプロジェクト学習』医学書院, 2010年, pp. 23-24
- 5) 大関信子「英国での卒後教育の実践」『Quality Nursing』, 6(3), pp. 60-68, 2000年
- 6) 浅田豊, p. 56
- 7) 小島さやか「文献から見た看護教育におけるポートフォリオ評価活用の現状」『新潟青陵学会誌』, 第4巻3号, pp. 101-109, 2013年
- 8) 金子八重子他「スタッフが成長を実感できるポートフォリオの活用」『看護展望』36(9), pp. 20-27,

2011 年

- 9) 藤田千春他「看護基礎教育におけるポートフォリオの活用状況と学生による評価に関する文献検討——小児看護学教育への活用に向けて——」『横浜看護学雑誌』, 6(1), pp. 41-46, 2013 年
- 10) 安川仁子「ポートフォリオ評価に対する認識の違い——看護学校教員・臨地実習指導者・看護師——」『第 43 回（平成 24 年度）日本看護学会論文集（看護管理）』, pp. 103-106, 2013 年
- 11) 安川仁子「看護教員のポートフォリオ評価の認識 教員養成課程修了者の調査から」『看護教育』, 51(2), pp. 103-105, 2010 年
- 12) 正木治恵「生涯教育とポートフォリオの活用」『看護技術』, 47(7), pp. 101-103, 2001 年
- 13) 正木治恵, p. 102
- 14) 正木治恵, p. 103
- 15) 文部科学省「臨地実習指導体制と新卒者の支援」2015/12/5,
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401c.htm. 2015/1/15.
- 16) 佐伯胖『「学び」の構造』東洋館出版社, 1975 年, pp. 43-63
- 17) 西岡正子『成長と変容の生涯学習』ミネルヴァ書房, 2014 年, p. 86

〔参考文献〕

- 1) 大関信子「看護教育にポートフォリオの導入を」『Quality Nursing』, 6(3), pp. 52-53, 2000 年
- 2) 鹿毛雅治『学習意欲の理論 動機づけの教育心理学』金子書房, 2013 年
- 3) 鹿毛雅治・奈須正裕編『学ぶこと教えること 学校教育の心理学』金子書房, 1997 年
- 4) 加藤真紀他「看護教育におけるポートフォリオ活用の文献展望」『島根県立看護短期大学紀要』, 11, pp. 99-107, 2005 年
- 5) 鈴木敏江『ポートフォリオとコーチング手法 臨床研修・臨床実習の成功戦略!』医学書院, 2006 年
- 6) 土持ゲーリー法一『ラーニングポートフォリオ 学習改善の秘訣』東信堂, 2009 年
- 7) Jean Lave and Etienne Wenger, 佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』産業図書, 1993 年
- 8) Malcolm S. Knowles, 堀薫夫 三輪健二監訳『成人教育の現代的実践 第三版』鳳書房, 2012 年
- 9) Sue Fostaty Young・Robert J. Wilson, 土持ゲーリー法一監訳『「主体的学び」につなげる評価と学習方法 カナダで実践される ICE モデル』東信堂, 2013 年
- 10) Yrjö Engeström, 松下佳代・三輪健二監訳『変革を生む研修のデザイン』鳳書房, 2010 年

（たかぐち みさき 教育学研究科生涯教育専攻修士課程修了）

（指導教員：西岡 正子 教授）

2016 年 9 月 30 日受理